

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	空飛ぶ三輪車・野口保育所
施設所在地	東村山市野口町3-7-3
法人名	特定非営利活動法人子ども自然探検隊空飛ぶ三輪車

1. 活動のテーマ

<テーマ>

生き物に触れる②鳥(鶏、烏骨鶏、インコ)と亀の飼育をして食や命の循環を知り考える

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

当保育所では従来より鳥と亀等の飼育を行い、子どもたちが日常的に生き物に触れ、身近に感じながら親しみを覚えることを大事にしてきた。毎日の世話を通して、その生態や食べること、卵を産むこと、排泄すること、病気や時として生き物の死にも立ち合い、命の尊さや摂理を知る。またミミズを鳥のエサにしたり、フンを自前の畑のたい肥に使用したりと広い意味で命の循環、食物連鎖なども体験として知る貴重な機会と捉えている。現在鳥小屋には名古屋コーチン、烏骨鶏、インコと鳥の種類が多く、子ども達は惹きつけられ、その違いについてよく話題に上ったり、年齢を問わずに興味を持っている。今年はその生態や卵の違いなどもじっくりと観察し、飼育方法も改良するなど子どもたちと考える時間を設ける取り組みをしようと考えた。

2. 活動スケジュール

【鳥】・6月～7月 「鳥はどんなエサを食べるか」をテーマにして毎日のエサやりを各年齢で交代に行った。大きい子は図鑑で調べたり保育者の説明をうけたりしてどんなものを好んで食べるかよく観察した。畑の雑草(はこべやカタバミ)をあげたり、インコのエサの食べ方の特徴も気づいていた。

・7月～10月 「名古屋コーチンと烏骨鶏が産む卵」をテーマにする。卵を拾い、給食で食べることや卵の違い(色、形)や産む時間や時期、産んだ後の習性、などを観察して知る時間を設ける。4、5歳児はなぜ保育所の鶏の卵は孵化しないか、などの問いを考えて見る。

・10月～11月 「フンの堆肥化」をテーマに大きい子は鳥小屋の掃除を大人と一緒にやり、フンをたい肥置き場に捨てる。たい肥が出来上がったなら自前の畑の肥料として使い、野菜の栄養になることを丁寧に伝える。また、野菜くずなどをエサとして与えながら、自然の循環を知るきっかけを作る。

【亀】 6月～11月 水替えやエサやりを毎日行う中で、どんな食べ物が好きか、亀の習性や特徴について調べて観察する。野外でミミズなどを捕まえて与えてみる。

・12月 霜の降りた頃、冬眠させる時期が来たと子どもたち自ら気づき、冬眠のさせかたを話し合い、落ち葉を集めてきた。冬眠中の亀の絵をみんなで書くことで亀に対する興味や愛着をもつ結果となった。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・記録用カメラ
- ・動物のエサ
- ・たらい、バケツ等

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

①えさについて

鳥が好きなエサを調べてからは野外に散歩に行く度に、子どもたちが自分たちで気づいて、ハコベ、タンポポ、カタバミ等をとってくる。毎日あげているとどんな草が好きかもわかってきて、「鶏が喜ぶね。お土産にしよう!」という発言が多くあった。また、インコの餌をあげる際に息をかけ空になった殻を飛ばすのは、インコが1粒1粒自分のくちばしで剥いて、中身を食べていることを聞いた子どもたちは「インコってすごいんだね」と感心している。

②卵について

小さい卵と、大きい卵がある、と気が付いた子は保育士とともにどちらが烏骨鶏でどちらが名古屋コーチンの卵か考えて毎日観察し、産んだタイミングで小さいほうが烏骨鶏と分かり、喜んでいた。大きい子が小さい子にこっちが名古屋コーチンの卵、と教えている姿もあった。

また、卵料理が給食で出た日に大切に味わって食べ、「鶏さん、ありがとう」と自然に感謝の言葉が出た子どもたちがいた。毎日世話をする中で鶏に愛着がわき、鶏肉を食べるのがかわいそうという子がいて、人間は鶏だけでなく、豚や、牛も食べていることや動物の命をいただいて生きていること、食物連鎖などについて、じっくり考えたりうなづいたりして対話が生まれていた。

④12月ごろ、年中、年長児は「そろそろ亀を冬眠させたほうがいいんじゃない？」と話し合って2歳児の子から年長までそのために落ち葉を少しずつ集めてくる期間があった。集めたもので亀に落ち葉の布団をかける。無事に冬を越せる用みんなて亀の絵を描きたいと考え、描いた絵を冬眠場所に貼り、大切に扱っている。

写真は3ページ目に添付

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・鳥の世話やかめの世話を通して、大きい子が低年齢の子にやり方を教えたり、自分たちでとってきたミミズを小さい子が喜ぶからと鶏にあげることを譲ったりする姿が見られ異年齢の良い関わりがたくさん生まれた。
- ・生き物の世話をすることで、小さな生き物も、自分たちと同じように食べて、生きていること、世話をしなければ弱ってしまう大切な命であることをどの子も理解できていたと思う。大きく言えば自分の食べているものも、他の命をもらって生きていることを感じることも幼児なりに理解できていると感じた場面があった。
- ・日々変化する生き物を工夫しながら世話をすることでどの子にも自信や自尊心が生まれ、気持ちの落ち着きや責任感、観察力を育むことができ、今後も継続して取り組んでいきたいと感じた。

空飛ぶ三輪車・野口保育所

すくわくプログラム

2024 年度 活動報告 添付写真

生き物に触れる② 鳥(鶏、烏骨鶏、インコ)と
亀の飼育をして食や命の循環を知り考える

